

演題 7. 歯学部学生の口腔内状態と歯科保健行動

○相沢 文恵, 染谷 美子, 阿部 晶子
稲葉 大輔, 米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

近年, 人間の行動や生活が病気の要因としてのみならず, 健康を回復し, 保持・増進させる方策としても大きな力を有することが明らかになってきた。このようなことから, 本研究は歯科に関して保健行動を実践している人としていない人の日常生活習慣, 生活満足度, 歯科保健に関する態度を比較し, いかなる要因が保健行動の実践に関わっているかを解明することを目的として行った。

1996年4月, 岩手医科大学歯学部1年生82名を対象として, 保健行動に関するアンケート調査, および歯科健診を行った。対象者の平均年齢は 20.05 ± 2.35 歳, DMFT指数は 8.27 ± 5.92 であった。

保健行動に関するアンケートは, 性別, 年齢, 家族形態に関する質問と, 生活習慣, 生活満足度, 歯科保健に関する態度等に関する42項目の質問からなっており, 歯科保健行動に関する6項目および喫煙についての質問には「はい」, 「いいえ」の二つから, 他の質問項目については「全くそう思う」から「全くそう思わない」まで5つの尺度をもうけ, その中から一つの回答を選択させた。

アンケートの結果は項目ごとに集計後, 「定期検診の受診の有無」, 「歯ブラシ以外の清掃用具の使用」の2つの保健行動について, その回答により対象者をそれぞれ2群に分け, 両群に属する学生の日常生活習慣, 生活満足度, 歯科保健に関する態度に差があるかをMann-WhitneyのU検定およびFisherの直接確率計算法を用いて分析した。

その結果, 規則的な生活や朝食の摂取, 喫煙など「健康的なライフスタイル」に関わる項目や, 「疾病に対する恐怖心」, 「家族関係や他の人間関係に対する満足度」, 「保健行動を実践する価値」に関わる項目に有意差が認められ, それらの要因が歯科における保健行動の実践の促進に関わることが示された。

演題 8. シクロスポリン服用患者の歯周治療例について

○菅原 教修, 富樫 正幸, 阿部 仰一
梁川 輝行, 松丸 健三郎, 上野 和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第2講座

近年, 臓器移植の増加とともにその際にみられる拒絶反応を抑制する目的で, 免疫抑制剤を使用する機会が多くなっている。免疫抑制剤のシクロスポリンの長期連用の副作用として, 歯周領域では歯肉肥大を生じることが報告されている。今回, 腎移植に伴うシクロスポリン服用による副作用と思われる歯肉肥大の患者の治療経過について報告した。

患者は, 12歳男児で本学泌尿器科の紹介で歯肉肥大の主訴で来科した。現病歴は慢性腎不全で平成5年6月に腎移植を受け, 免疫抑制剤シクロスポリン, イムラン, 副腎皮質ホルモン剤プレドニン, 降圧剤のCa拮抗剤エマベリン™, などを今日まで連用している。当科受診, 約1年前に歯肉肥大に気付く。アレルギーはない。既往歴は, 出生後間もなく慢性腎炎に罹患し, 5歳頃より平成5年6月まで腹膜透析, 血液透析をうけ, この間に高血圧, 心肥大となる。治療としては, 初期治療としてPlaque controlの徹底後, 4mm以上の仮性ポケットの部位には歯肉切除術を行った。術後9.5か月から10か月の時点で上下顎前歯部歯肉の一部に歯肉肥大の再発傾向がみられた。歯肉肥大部の組織所見では, 線維間の間質性細胞浸潤が顕著で炎症性細胞の主体は形質細胞であり, 毛細血管の拡張や増生は明らかではなく, ポケット部では大小のリンパ球が主体であった。本症例では, 1日のシクロスポリン投与量は, 130mgで体重1kgあたり3.25~3.51mgに相当し維持量としては少ないように思われた。1日のエマベリン投与量は1.5gで成人の投与量の半分であった。シクロスポリン歯肉肥大の発現の機序について, その誘因として薬の服用に加えて汚染性因子としての菌垢の存在とそれによる局所の炎症の関与や線維芽細胞による膠原線維の形成の促進などがあげられているが, いまだ不明な点が多い。本症例では, 口腔清掃状態は良好とはいえ, シクロスポリンとともにニフェジピンを服用している状況下での相互作用が, 歯肉肥大の発現に何らかの関連を有しているように推測された。今後は歯肉肥大と両薬剤との相互作用について検討していきたい。